（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	CERDA PHILIP KAIN
論文題目	Modernity and the Self: A critical study in the prehistory of the Kyoto School		

（論文内容の要旨）

本論文は、京都学派の哲学の成立の徴表と屢々目される西田幾多郎の論文「場所」の発表（一九二六年六月）以前の時期、つまり言うなれば、京都学派の前史に関する研究である。この研究の方法論を申請者は「批判的研究(critical study)」と名づけているが、この命名が意味するところを説明する為には、申請者の問題意識について予め述べておく必要がある。

今日、京都学派の哲学を巡る研究が、啻に本邦のみならず、国外においても空前の活況を呈しており、（例えば西田哲学研究や田邊哲学研究といった）それぞれの専門分野において漸次実り豊かな成果を上げていることは、衆目の一致するところであろう。しかしながら、かかる個々の専門的研究の（一見）慶賀すべき進展の中に、申請者は、各分野がそれぞれ内閉化し、相互没交渉の度合いを強めていきかねない「内在主義(internalism)」の危険を嗅ぎ取る。（丸山眞男の所謂）「タコツボ化」しつつある専門分野同士を架橋し、以て京都学派の哲学の研究において建設的な協調関係を産み出すべく、異分野間の議論にとって共通の地盤となるような理論的な枠組みを準備すること。これが本研究における申請者の問題意識である。

今述べた理論的枠組みの構築という目的に資する手立てとして提唱されるのが、件の「批判的研究」である。申請者によれば、以上の目的に鑑みて、批判的研究とは、研究対象が当時置かれていた時代的な制約を具体的に解き明かさんとする「文脈史(contextual history)」の考察と、今日の研究者が己自身の哲学的な問いを携えつつ、当該の研究対象に取り組む際に否応なく身を置かざるをえない特定の問題史的な状況たる「精神史(history of mind)」から要請される探究を同時に行いつつ、両者の統合を図るものでなければならないのである。

先述のように、申請者は一九二六年迄の京都学派の前史を俎上に上すことを企図する訳であるが、これは無論、文脈史的な問題設定である。では本論文が取り組む精神史上の問題とは何か。それは「脱伝統化(detraditionalization)」（これまで暗黙の前提とされてきた伝統を悉く問いに付し、その正当性を問い質すこと）と「己自身になること(to become oneself)」という二つの問題である。但し双方を一括する場合、申請者はこれらを「モダニティの問題(modernity question)」と総称する。本論文の主題目が「Modernity and the Self」と定められた所以はここにある。

以上が序論（第一章）の梗概であるが、本論文の中核をなすのは、後続の四章である。

まず第二章では、西田の先蹤をなした本邦の西洋哲学研究の開拓者の一人、井上円了の『哲学一夕話』（一八八六年）、及び『善の研究』の刊行以前（一九〇四〜〇六年）に若き西田が行っていた講義の草稿である「心理学講義」と「倫理学草案（第一・第二）」の読解を通して、これらの著述において、井上と西田が「モダニティの問題」（就中「己自身になること」という課題）を共有しているさまが確認される。

次いで第三章においては、西田の上述の講義草稿に加え、同時期の彼が残した覚書の集成である「純粋経験に関する断章」にも依拠しつつ、最初期の西田の人格論の分析が試みられ、その眼目が、社会性の次元における人格間の相互承認を通じた個々人の自覚（及びそれに伴う自己の確立）を構想するところにあるという解釈が呈示される。

第四章は、西田の前期哲学の代表作たる『善の研究』（一九一一年）並びに同書に関連する西田の他の著述に窺いうる思想の特質を「カント以後の形而上学の試み」として捉える試みである。なおここで「カント以後」とは ── カントその人の理論哲学が理性の限界の劃定に主眼を置いていることとは対照的に ── 人間の認識能力に伏在している無制約的な自発性の顕在化こそが重要であることを『善の研究』が強調せんとしているさまを言い当てんとするものである。

最後に第五章では、西田の高弟の一人である西谷啓治の初期の論文の中から「対象の超越性 ── 無心の唯心論」（一九二五年）等が取り上げられ、その読解を通して、西谷の所謂「主観の生ける働きの意味」が「アプリオリな自由」にあること、及びこの「アプリオリな自由」の問題圏においては、論理（学）が重要な意義を有していることが主張される。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

序論において明言されているように、本論文の狙いは、京都学派の哲学の前史を巡る批判的研究を行うことを通して、それぞれが己の特殊な専門領域に立て篭り、専ら孤塁を守ることに終始している（と申請者の同時代診断が難ずるところの）京都学派の研究者同士が建設的な協調を試みる暁に必要になると思しき理論的枠組みを予め構築せんとするところにある。ここにまず本論文の際立った特色があることは明らかである。すなわち、啻に（自らの研究対象たる）京都学派の哲学のみならず、当該の哲学に関する研究をも ── 別言すれば、対象の次元だけではなく、同時に又、メタ・レヴェルも併せて ── 問題にする試みである点で、本論文は他に類を見ない独自性を備えている。そして如上の同時代診断には、申請者とは意見を相異にする人々にとってすら一考に値する問題提起が含まれていることは否めないように思われる。

本論文の第二の特長は、京都学派の哲学者（具体的には西田と西谷の両名）の思想をして欧米の現代哲学（例えばD. ヘンリヒ、M. ガブリエル、R. ピピン等のそれ）と対峙せしめ、以て前者に潜在する現代的意義を詳らかにしたことである。申請者が説く自己意識（或いは自覚）を巡るヘンリヒと西田の見解の相違や、「統覚」観に関するピピンと西谷の類似性等は管見の限り、未だ嘗て何人もこれを指摘しえなかった事柄である。加之、この比較研究の成果は新味のみならず、哲学的な意義にも富み、珍重すべきものである。そしてこれは言語の日英の別を問わず、一次・二次文献の瞠目すべき博捜渉猟を行いうる申請者ならではなしえなかった快挙であり、大いに評価に値する。

本論文に関して更に特筆大書せられるべき点は、仮にこの論文をその研究対象たる京都学派の哲学から切り離した場合においても認められうるものである。すなわちそれは、申請者独自の「モダニティ」論（具体的には「脱伝統化」と「己自身になること」の問題を巡る考察）に他ならない。その精華は蓋し、次の二点に約言されうる。

その第一は、「脱伝統化」とは「伝統的」であると見做されている旧来の諸制度からの脱却などではなくして、寧ろその妥当性を改めて問いに付することであると共に、他ならぬ自己自身の正当性をも（否、寧ろ正にこの自己の正当性こそを）自らに反省的に問い直す不断の自己認識の試みであることである。しかしながら第二に留意せられるべきは、我々各人がそれぞれ、反省による自覚を通して「己自身になること」は、逆説的にも当の反省の再帰性のみを以てしてはなしえず、却って寧ろ我々が互いに互いを人格として承認し合いながら、その時々の相互承認によって人格と人格の間を統べることになる社会的な規範を銘々が我が身に敢然と引き受けることによって初めて可能になることである。以上の二点を以て自らの核心的な主張となす申請者の「モダニティ」論は、絶えざる反省や相互承認の動性によって間断なく揺るがされ

うるものとして自己と社会を捉え直そうとする点で極めて興味深い主張であり、注目に値する。

しかしながら、このように美点が多々認められる本論文にも疑問点がないわけではない。苟も京都学派の哲学の研究にとって規矩準縄となりうる理論的枠組みを構想せんとするのであれば、本論文は当該学派の前史のみならず、その最盛期をも考察する必要があったのではあるまいか。さもなくば、件の構想はやはり画龍点睛を欠くと言わねばならぬのではないか。また西田や西谷の議論を上述の「脱伝統化」や「己自身になること」といった問題の圏内でのみ考えることは果たして（そしてまた如何なる程度迄）至当であるのか。西田にとって禅は「脱伝統化」の対象であったのか。或いは「自我が自我に帰ること」によって初めて達せられるものとして西谷が考えるところの「自己を忘れた自己」は、人格同士の相互承認の産物たりうるのであろうか。

だが申請者にとっては、これらは皆、他日に期すべき別稿の課題にすぎぬであろう。先述の特長に鑑みて、本論文が高い評価に値することは、当該論文の調査委員一同の間で意見の一致を見たところである。申請者の労を多とするものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和六年一月二十九日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては期限を定めず、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降